

一粒のお米に込められた思い

呉市立横路中学校 一年 佐渡 愛

最近、米不足でお米が高騰しています。そんな中で、政府は備蓄米を放出しました。しかし、備蓄米が余るなどの課題も見られます。昔は、お米が多すぎて減反政策を行なったこともありました。常にお米は身近にあり、日本の文化や生活と深く結びついています。そんなお米について心に残っているエピソードを紹介します。

私は五月、田植えの手伝いをするために、家族で祖母の家へ行きました。私達が家に着いたころには、もう田植えが始まっていました。その日は晴天で、田植え日和でした。まず、母と妹と一緒に苗箱を洗いました。苗箱は借りているものなのできれいにして返さないといけません。妹は水を使わずに泥や根を落とす役、私は苗箱を水につけてブラシでこすり、よごれを落とす役、母は仕上げに水で流す役と役割分担をして作業を進めました。

た。妹がきれいにしてくれた苗箱を水につけ、ブラシですみずみまで磨いていきました。最初は簡単な作業だと思っていしましたが、ブラシでこすってもすき間に入らな泥や根がなかなか落ちず、苗箱をつける水はすぐによごれ、とても大変でした。ブラシのゴシツゴシツという音は力が弱くなるにつれて、小さくなつていきました。十五個ほどをやると洗い終わつたと思つたらまた十個運ばれてきて、最終的にはうでや腰が痛くなりました。けれど、

親戚の方に

「とても助かったよ。ありがとう。」

と言っていただけで頑張ってよかったなと思いをしました。ピカピカになつた苗箱を見て、私の心までピカピカになつたような気がしました。た。

次に、手植えを体験しました。私と妹は入口の近くの空いていたスペースに苗を植えることになりました。最初は田んぼの中に足を入れるのがこわかったです。けれど、勇気を

出して一歩足を入れてみると、思ったより深く沈み、足がぬるぬると動きにくくて驚きました。それなのに父はほとんど進んで苗を植えていたので、すごいなと思いました。最初は苗をどうやって植えるかよく分からず、手元が不安定になっ てしまい、苗をまっすぐ植えるのも一苦労でした。けれど、苗を何本か植えると慣れてきて、楽しかったです。田植えが終わるころには田んぼ一面に苗が並びました。その光景はとてもきれいで、今も忘れ

られません。

今回、初めて田植えを手伝ったけれど、とてもつかれました。この作業を毎年行っているのはすごいなと思いました。田植えが終わった後に食べたお米はいつも以上においしく感じました。その味をかみしめながら、私は「こうやって一つ一つ手間をかけて育てたお米だからこそ、こんなにおいしいんだ」と心から思いました。

このように、農家さんの頑張り、苦労があ

るからこそおいしいお米ができているのだと
実感し、食べ物に対する感謝の気持ちが深ま
りました。これからもお米を食べるたびに、
農家の方々の苦勞を思い出し、感謝の気持ち
を忘れずにいたいと思います。また、稲刈り
も手伝いに行きたいです。苗の成長が楽しみ
です。